

はなやか関西～文化首都年～2011「茶の文化」

非公開茶室の見学

実行委員会が実施する取組

非公開茶室の見学（大徳寺コース）を開催しました。

平成 23 年 6 月 6 日（月）

参加者 33 名（「募集要項」に基づきご応募いただいた方から抽選）

【集合・受付】

大徳寺休憩所に集合。

実行委員会委員長の堀井良殷氏（財団法人大阪 21 世紀協会理事長）挨拶。解説案内者紹介。

◎中村 昌生 氏（京都工芸繊維大学名誉教授、財団法人京都伝統建築技術協会理事長、茶の湯文化学会参与）

1927 年 愛知県生まれ。現在、京都工芸繊維大学名誉教授、福井工業大学名誉教授。多年にわたり日本建築の伝統追究のため茶室・数寄屋の研究に専念。この間日本建築学会賞、日本芸術院賞など受賞。伝統建築技術の継承発展のため、同志と財団法人京都伝統建築技術協会を設立し、現在理事長をつとめる。多数の著書の中で『図説茶室の歴史 基礎がわかるQ&A』、『数寄屋と五十年』（淡交社刊）などが入手しやすい。作品集に『数寄の空間』（淡交社刊）等。

◎岩崎 正彌 氏（実行委員会アドバイザー、皇學館大学現代日本社会学部伝統継承文化創造コース准教授、茶の湯文化学会理事）



堀井実行委員長



中村 昌生 氏



岩崎アドバイザー



【聚光院（重要文化財茶室閑隠席・桧床席）】

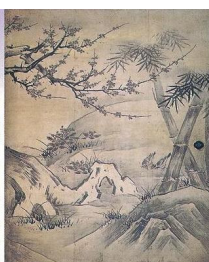
京都で一時実権を握った戦国武将の三好義継が亡養父の長慶の菩提を弔うため、1566（永禄9）年、大徳寺107世笑嶺宗訴を請じて建立。利休からの永代供養寄進状があり、以来、三千家の菩提寺。「百積庭」は利休の作と伝えられる。利休 150 回忌の 1741（寛保元）年に千宗左表千家 7 代如心斎が寄進した利休好みの三畳台目「閑隠席」、表千家 6 代覚々斎好み四畳半「桧床席」がある。



「百積庭」についての中村氏の説明を熱心に聞き入る参加者



国宝 狩野永徳筆 花鳥図

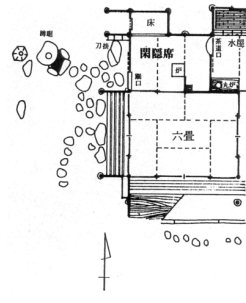


出典：聚光院パンフレット

◎方丈庭園

この「枯山水の平庭」は百積庭と称し、狩野永徳の下絵を元に千利休居士が整えたと伝えられる。

手入れの良く行き届いた苔に一面覆われ、中央に架けられた石橋を中心に東西両面に石組みがなされている庭園は、室中の襖絵（狩野永徳筆）と対する関係にあると言われ、室中東面の襖絵と庭園の西の部分の石組みなどの配置が良く似ており、室中を中心とした方丈と、その襖絵及び、庭園が同じ意図のもとに造られたと伝えられる。（出典：聚光院パンフレット）



出典: 中村昌生著『茶室百選』
(発行所: 楳淡交社)

出典: 聚光院パンフレット

◎茶室閑隠席一重要文化財一

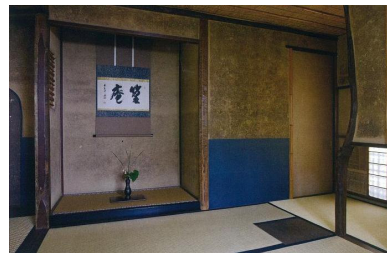
この茶席は、寛保元年(1741)利休の百五十回忌に当り、表千家如心斎が寄進したものと伝えられている。利休好みの三畳のお茶室で、茶禅一味の境地を表わす茶席である。点前座には、中柱を立て、炉を上げ台目に切っている。天井は、野根板張り、白竹打上げ平天井で、点前座は蒲の落天井。窓は、床の墨蹟窓と蹴口上の連子窓のみで、素朴な中に禅の厳しさを表現している。また樹床席(重文)もある。(出典: 聚光院パンフレット)

【三玄院 (茶室篁庵)】



1589(天正 17)年に石田三成、浅野幸長、森忠政が春屋宗園を開山として創建。石田三成、森忠政(蘭丸の弟)、古田織部、藪内剣仲(紹智)の墓あり。

宗旦が喝食(見習いの僧)として、春屋宗園のもとで修業。織部好みの三畳台目八窓の「篁庵」がある。



出典: 三玄院パンフレット

【昼食「泉仙」鉄鉢料理】



◎鉄鉢料理

鉄鉢とは、僧が食物を受けるために用いた鉄製のまるい鉢のこと。遠くインドにはじまり、日本へは奈良時代に伝わり、托鉢の僧が用いたと言われています。「泉仙」の鉄鉢料理は、この鉄鉢を形どった器に、四季折々の味覚を盛りこんだもので、禅のこころと京料理の伝統を現代に生かしています。(出典: 泉仙パンフレット)

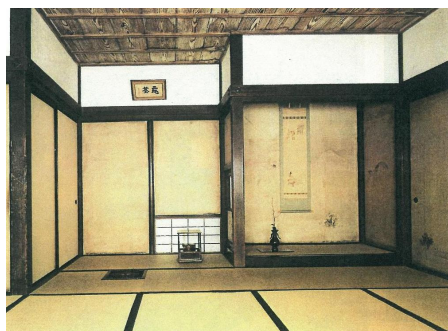
【高桐院 (茶室松向軒・鳳葉席)】

利休七哲の1人細川忠興(三斎)が、父の藤孝(幽斎)の菩提所として1601(慶長6)年創建し、三斎の舎弟玉甫を請じた。書院「意北軒」は利休の邸宅を移築したもので書院につづく二畳台目「松向軒」は北野大茶会の折に三斎が建てたものを移したと伝える。客殿の西の庭に建っている石灯籠が三斎とガラシャ夫人の墓塔で、もとは利休秘蔵の灯籠だったが、豊臣秀吉と三斎のふたりから請われて、利休はわざと裏面三分の一を欠いて疵物と称して秀吉の請を退け、のちに利休割腹の際、三斎に遺贈されたもので、遺命により遺骸を埋めその上に立てたと伝える。

【お抹茶とお菓子をいただきました。】

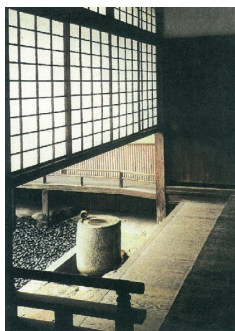


こほうあん ぼうせん さんうんじょう
【孤篷庵（重要文化財茶室忘筌・山雲床）】



忘筌 床を見る

出典：中村昌生著
『茶道聚錦七 座敷と露地（一）』
（発行所：榊小学館）



忘筌 縁先の手水鉢

出典：中村昌生著
『茶室大観Ⅲ』
（発行所：榊創元社）

小堀遠州が 1612（慶長 17）年に龍光院内に営んだ小庵を 1643（寛永 20）年に現在の地に移し、江月宗玩を改組として本堂・庫裡・書院を建立したのが始まり。

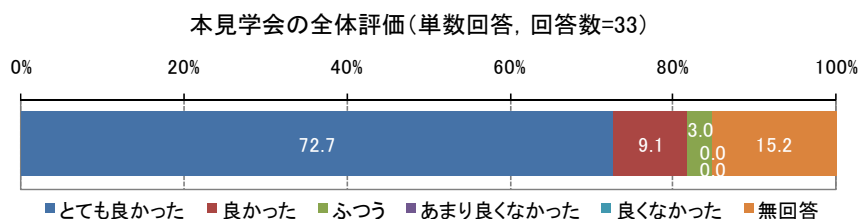
九畳（手前座一畳を含む）と三畳の相伴席からなる十二畳の広間の茶席で、一間幅の床を設ける。床脇の手前座の壁は腰に明かり障子を嵌め込み、草庵風の意匠も取り入れている。天井は板の木目が浮き出た「砂摺り天井」と称するものである。松平不昧による再建とはいえ、焼失前の古図から忠実に再現された小堀遠州好みの茶室。庵号の「孤篷」は孤舟のことで、小堀政一（遠州）が師事した春屋宗園から授かった号である。

【閉会】

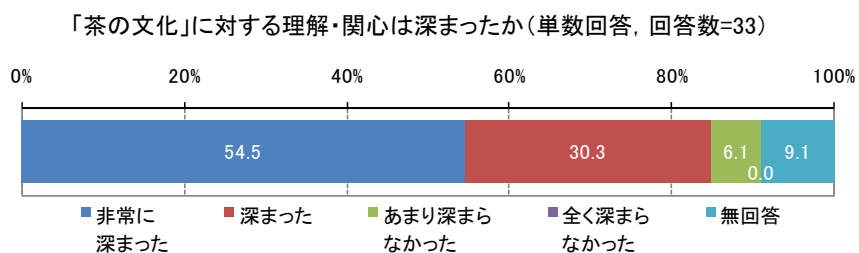
【アンケート結果】

本コースの参加者に対しアンケートを行い、結果は以下のとおりであった。

今回の見学会全体を通しての評価は「とても良かった」・「良かった」合わせて 81.8%であった。



今回のプログラムを通じて、「茶の文化」に対する理解・関心は深まったか、という問いに対しては、「非常に深まった」・「深まった」合わせて 84.8%の人が深まったと答えた。



今回のプログラムは関西の「本物の文化」を発信するプログラムとして有効と思うか、という問いに対しては、「非常に有効と思う」・「有効と思う」合わせて 94.0%の人が有効と思うと答えた。

